

## 『赤と黒』の余白に：『ヴァニナ・ヴァニニ』の成立

高木, 信宏  
九州大学大学院人文科学研究院

<https://doi.org/10.15017/8813>

---

出版情報：Stella. 25, pp.47-63, 2006-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン：  
権利関係：



# 『赤と黒』の余白に

## ——『ヴァニナ・ヴァニニ』の成立——

高 木 信 宏

『赤と黒』の創作過程を探るうえで看過できない作品に『ヴァニナ・ヴァニニ』(以下『ヴァニナ』と略記)がある。制作の時期が重なっているだけでなく、作中に描かれる恋愛には前者第2部の核をなす〈頭の恋〉との類似が顕著だからである。しかも両小説の女主人公(マチルド・ド・ラ・モールとヴァニナ・ヴァニニ)には、瓜二つといってよいほどよく似た性格を認めることができる。従来の研究は、この中編小説の制作が時期的に見て『赤と黒』第2部の執筆に先立つとし、ヴァニナの人物像をラ・モール嬢のいわば原型と見なしてきた<sup>1)</sup>。しかしながら『赤と黒』の最初の着想時期、さらにはマルセイユでの『『ジュリアン』のアイデア』にかんする我々の仮説を踏まえるならば<sup>2)</sup>、〈アマゾン〉系列のヒロインとしてスタンダールが最初に造型したのは、むしろマチルドのほうであった可能性が浮上する。本稿では『ヴァニナ』の源泉にかんする先行研究を再検証し、作家がこれらアマゾンたちの鋳型を手にする過程、すなわち創造的なイマジネーションの展開を新たに考察したい。

### 1

『ヴァニナ』の源泉については諸説がある。たとえばルイ・アラゴン『ローマ散歩』(1829年)にリヴァローラ枢機卿暗殺未遂事件など、炭焼党がかかわった3つの逸話が登場することに着目し、これらとは別に『ヴァニナ』の源泉となった実話が草稿段階では含まれていたはずとの説をたてた<sup>3)</sup>。スタンダールがそれを『ローマ散歩』に採録せずに中編小説として別個に作品化したのは、炭焼党員への共感をあらわにした内容であり、ガイドブックという同書の性格にはそぐわないと判断したからだという。ビブリオフィル版の校訂者エルネス

ト・アブラヴァネルも同説を支持しているが<sup>4)</sup>、しかし該当する出来事が現実  
に存在するのかどうかは今もって不明である。たしかにアラゴンが抛りどころ  
とする『ローマ散歩』の挿話のひとつにはヴァニナの性格を思わせる尊大な修  
道女が登場しはするが<sup>5)</sup>、話そのものは恋愛を主題にしているとは認めがたく、  
また結構において共通する要素に乏しい。これに対して、ボリス・レイゾフが  
『ヴァニナ』の源泉と見なす史実のほうが見るべき点は多く、検討に値するよう  
に思われる。

1799 年ナポリでバッケル兄弟がラッザリーニ蜂起を策謀した。その騒動に巻  
き込まれたのが、ヴァニナのモデルとしてレイゾフが推すルイーザ・サンフェ  
リーチェである<sup>6)</sup>。アレクサンドル・デュマの筆によって小説化・神話化され  
た彼女の半生について、今日ではおよそ次のような実像が明らかになっている――。スペイン貴族の血を引くルイーザは 17 歳で結婚後、身分不相応の濫費  
癖のせいで借財と縁が切れず、その行状は国王を始め周囲の不興を買うことが  
多かった。どちらかと言えば放埒な性格の女性であり、ナポリの政治的な問題  
には関心がなかったという。彼女がバッケル兄弟の陰謀に巻き込まれてしまっ  
たのも、そうした素行が大いに禍いした感がある。事件当時 35 歳の彼女には夫  
アンドレアの他に 3 人の愛人がおり、そのうちのひとりが首謀者ジェラルド・  
バッケルであった。王党派の彼は仲間とともに、ナポリのパルテノペ共和国を  
支えるジャコバン派の暗殺を企てる。このとき彼はルイーザが巻き添えをくわ  
ないように王党派を示す符牒の札を渡す。彼女が札を本命の情夫フェルディナ  
ンド・フェリに渡したところ、彼が共和主義者であったため策謀が政府側に露見  
してしまう。ただし当局の取調べに対して彼女は気丈にもバッケルの名を最後  
まで明かさなかった、というのが事の顛末である<sup>7)</sup>。情人たちの政治思想に対  
する彼女の無頓着さ、いわば政治的関心の欠如が事件の要となっているだけ  
に、いささか喜劇的な印象はまぬかれない。

こうしたルイーザの現実の姿と 1826 年版の『ローマ、ナポリ、フィレン  
ツェ』がとりあげるそれとは大きく異なっている。スタンダールの筆は、宮廷  
人の集まりで国民軍を襲撃する謀略を知るや、その士官であった恋人を引き止  
めんと足下へ身を投げだすルイーザの一途な姿を伝えている<sup>8)</sup>。つまり想定さ  
れているのは、愛し合う男女が貴族と平民という階級的な障碍を乗り越える物  
語であろう。美化されたルイーザ像は『パルムの僧院』(1839 年)にも登場す

る。その第7章ではルイーザをパルムの大公が、共和主義の新聞を主宰した才知に富む25歳の美女と見なしている<sup>9)</sup>。しかも彼女の名はサンセヴェリナ公爵夫人と同じタイプの女性として挙がっているのである。なぜこうも実像と異なってしまったのか。おそらくその主因は作家の情報源にあったと思われる。レイゾフによれば、スタンダールはルイーザについて当時の様々な関連文書ではなく、ナポリ出身の友人ドメニコ・フィオーレから情報をえたという<sup>10)</sup>。そうだとすれば、我々は次のように推論することができよう。1799年当時、ナポリで政変の渦中にあった弁護士フィオーレは、後の文書が明らかにするようなバッケル事件の真相など知る由もなかったであろう。むしろ共和主義者のフィオーレにとって、ルイーザはジャコバンたちの危機を救った女傑として記憶されたはずである。共和主義陣営の才女エレオノーラ・デ・フォンセーカ・ピーメンタルが同年4月13日の「モニター・ナポリターノ」紙にルイーザを反王党派の英雄に祭りあげる記事を書いたように<sup>11)</sup>、事件後にジャコバンたちの間ではルイーザの神話化が行われたことは想像に難くない。後年フィオーレがそうしたヒロイン像を、共和主義に共鳴するスタンダールに伝えたとしても何ら不思議はないのである。ヴァニナのモデルとしてルイーザを検討するのであれば、とうぜん彼女の実像ではなく、愛国者として美化された女性像のほうでなければならない。すると、両者の共通点はイタリアの美しい貴族女性がジャコバンの平民青年を愛し、彼を窮地から救うという構図に限定することができる。

ところで、着想源をめぐるレイゾフの論証には、どのような文脈でスタンダールが独自の「サンフェリーチェ」像を小説化しようと思いついたのかという視点が欠けている。こういった創作動機を考えるうえで見過ごすことができないのは、同作の発表媒体、すなわち「ルヴュ・ド・パリ」誌であろう。というのも中編小説『ヴァニナ』は、中・短編作品を売り物にするという、この文芸誌の企画を踏まえて作られた観があり<sup>12)</sup>、同誌への寄稿こそがその直接の執筆動機であったと考えられるからである。

「ルヴュ・ド・パリ」誌の主宰者ルイ・デジレ・ヴェロンとスタンダールの間をとりもったのはブロスベル・メリメだとされる<sup>13)</sup>。早くも同誌第2号に『マテオ・ファルコネ』を寄稿したメリメはしかし、1829年4月の創刊当初からヴェロンと親交を結んでいたわけではない。はじめ彼らの関係がどの程度のも

のであったのかは、メリメがヴィクトル・ユゴーに宛てた 1829 年 5 月 11 日付の書簡に窺い知れる――

私はまだ「ルヴュ・ド・パリ」誌を一冊も受け取っていませんし、そのことに憤りを覚えます。せめてヴェロン氏がアガド社への振込為替を送ってくれて、私の気持ちを鎮めていたらよかったのですが。貴兄がこの V〔ヴェロン〕に会われるのなら、彼のやり方はフランス人の流儀から外れていると、それとなく当てこすってください。<sup>14)</sup>

文面からメリメとヴェロンの間にまだ信頼関係がなかったことは一目瞭然である。この時点では前者がスタンダールのために仲介の労をとるような環境は整っていなかったと見なせよう。

ヴェロンに対するメリメのわだかまりを、おそらくユゴーが取り除いたのであろうか。翌 6 月第 2 週に発行された「ルヴュ・ド・パリ」誌第 3 巻・第 2 分冊に、ペルーの首都リマを舞台にしたメリメの寸劇『聖体の 4 輪馬車』が載った。もちろんこの寄稿は<sup>15)</sup>、前月中に編集者に対する彼の憤懣がどうかおさまったからこそ実現したはずである（これ以後メリメは、『シャルル 11 世の幻想』や『タマンゴ』などの中・短編作品を同誌上で次々と発表し、執筆陣の中核をなす）。

興味深いのは、ちょうど同じ頃、スタンダールが「ルヴュ・ド・パリ」誌を好意的に紹介するコラムを書いている事実である。7 月発行の「ニュー・マンズリー・マガジン」誌に載った同記事の日付は 1829 年 6 月 10 日<sup>16)</sup>。メリメとヴェロンの関係修復の時期に接している。前者がスタンダールを後者に紹介したのならば、この少し前、すなわち 5 月下旬あたりと推定できよう。しかもスタンダールの好意に応えるかのようにヴェロンが 8 月、『ローマ散歩』の近刊予告のために筆を執り、自分の雑誌で詳しく魅力を紹介していることから考えても<sup>17)</sup>、5 月下旬頃に、両者の間には情報のやりとりを含め、仕事上の交流が生じたとしてもけっしておかしくはない。とうぜん「ルヴュ・ド・パリ」誌への寄稿を前提とする『ヴァニナ』の着想は、この時期よりも後でなければなるまい。

すると、『ヴァニナ』は『ローマ散歩』の草稿から切り離された作品というアラゴンの推測はますます成立しがたいのではないか。後者の契約が交わされたのは 1829 年 3 月 14 日<sup>18)</sup>、校正は遅くとも 4 月半ばには始まっていた。しか

もサンフェリーチェの一件が着想源だとすれば、そもそもナポリ・パルテノペ共和国を舞台にする逸話が『ローマ散歩』の草稿に含まれていたとはなおのこと考えにくい。

では、当時スタンダールの脳裏にルイーザの人物像が甦るきっかけはあったのだろうか。このことを探るうえで見逃せないのは、共和主義のロマン主義者という異名をもつアンリ・ド・ラトゥーシュの存在である。彼はアンドレ・シェニエの詩華集の編纂者として、また詩人マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモールとの恋愛によってつとに知られるが、スタンダールとは1810年代にイタリアで出会っている。同国の芸術や文学の話題で意気投合したふたりは、帰国後も首都でいっそう親交を深めていった<sup>19)</sup>。このラトゥーシュが1829年6月、まさに問題の時期に1799年のナポリ革命に取材した歴史小説『フラゴレッタ——1799年のナポリとパリ——』をルヴァヴァスール書店から上梓しているのである<sup>20)</sup>。

新作の話題は時を移さずにスタンダールの耳に入ったに違いない。同書の詳細な近刊予告が6月第2週の「ルヴュ・ド・パリ」誌第3号・第2分冊（前述のメリメ『聖体の馬車』を所収）に載っている。いやむしろ両作家の交友のあり様からすれば、事前にラトゥーシュがスタンダールに出版の話をしていただ可能性すらある。アンスロ夫人やジェラル男爵等の主催するサロンの常連だった彼らが1829年当時も交際を続けていたことは、スタンダールの書簡に痕跡を確認することができよう<sup>21)</sup>。しかもラトゥーシュとはよほど話が合う仲だったのか、彼は1832年6月、領事として駐在するチヴィタ＝ヴェッキアで書店主アンリ・デュピュイに宛てた手紙の追伸にこう記している——「かの俊才、ド・ラトゥーシュ氏に会われる折には、私がしきりに彼の機知に富んだ話を懐かしんでいるとお伝えください」<sup>22)</sup>。

興味深いことにサント＝ブーヴは『月曜閑談』のなかで『フラゴレッタ』にまつわる裏話を述懐している<sup>23)</sup>。それによれば、ある友人から両性具有にかんする心理分析小説のアイデアを授かったラトゥーシュは、しばらく逡巡したものの、その主題に政治的・歴史的な枠組をあたえて作品化したのだという。件の友人がスタンダールその人であったかどうかは定かでないが、ふたりが創作の題材について互いに胸襟を開く仲であったことは、かつてデュラス公爵夫人の『オリヴィエ、あるいは秘密』のテーマをめぐる競作した事実明らかに

あろう<sup>24)</sup>。しかも1829年1月初旬、スタンダールが『ローマ散歩』の原稿をラトゥーシュに見せ、書店の買値を見積もってもらい、その評価に満足していることを想起するならば<sup>25)</sup>、イタリアの芸術・文化について造詣が深く、共和主義に共鳴するふたりの作家が、王政復古末期のいよいよ反動化する政治状況下であって、1799年のナポリ革命を背景にもつ小説のことを話題にしなかったとはとうてい信じがたい。もちろん、こうした状況のみでは『フラゴレッタ』の創作にスタンダールがどう関与したのかを解明するには至らないが、少なくとも彼がラトゥーシュの口から小説の中身について事前に情報を得ていた蓋然性を示すのには十分であろう。ルイーザ・サンフェリーチェこそ登場しないものの、ナポリ革命を扱った小説がスタンダールに彼女の逸話を思い出させる契機になった、そう推測しうるだけの背景は確かにあったのである。

## 2

以上のようなヴェロン、ラトゥーシュとの関係を踏まえるならば、スタンダールが『ヴァニナ』の着想を得る状況が整ったのは、1829年6月に入ってからだと推しはかることができる。つまり「ルヴュ・ド・パリ」誌への寄稿を打診された作家は、話題作『フラゴレッタ』からの連想でサンフェリーチェの物語を素材にして中編小説を書くアイデアを得た、との仮説を立てることが許されよう。しかしながら、はたして彼はこの着想から間をおくことなく原稿の執筆に着手しえたであろうか。そう思えない理由として、スタンダールがこの6月以降、『ローマ散歩』の校正に精力を傾注せざるをえない状況にあったことがまず挙げられる。

ドゥロネー書店との契約では、校正作業の期限は6月1日であった<sup>26)</sup>。にもかかわらず、スタンダールが校正刷に筆を加えて内容を改め続けたために、作業は7月末までずれ込んでしまう。たとえば校正作業も大詰めを迎えた7月23日、彼はアンリ・シメオンに対して、「ルヴュ・ド・パリ」誌第4号（7月第1週発行）に掲載された後者のローマ滞在記から『ローマ散歩』へ引用する許可を請うている<sup>27)</sup>。このように最後まで内容の充実に努める姿勢からは、『ローマ散歩』の仕事に取り組む作家の熱意のほどが窺われよう。さらに校正終了後、彼は正誤表の作成も怠っていない<sup>28)</sup>。ようやく別の仕事、『バイロン卿について

の思い出』——これは翌年の「ルヴェ・ド・パリ」誌第12号に掲載される『イタリアにおけるバイロン卿』の草案——をスタンダールが書いたのは、大仕事が一段落した8月24日である<sup>29)</sup>。

おそらくスタンダールは中編小説の着想後、1829年の夏のあいだは物語の構想を固められずにいたのではないか。そう我々が推測する根拠として、スタンダールが1840年10月、バルザック宛書簡の下書に記した次のくだりが挙げられる——「私はいくつか小説のプランを作りました。たとえば『ヴァニナ』。しかし筋書を作ると私の熱は奪われてしまいます」<sup>30)</sup>。これに続いてスタンダールが『パルムの僧院』の創作では即興的に草稿を書いたと回顧していることを踏まえると、『ヴァニナ』の創作では筋書を練る作業に縛られて容易には原稿の作成に移れなかったように思われる。

しかも作家はサンフェリーチェの美談をそのまま歴史小説にしたのではない。彼女の理想家された女性像は、作家のイマジネーションが結晶化する核のごときものであって、これを小説にするためには同時代的意義を帯びた背景が必要だったはずである。『アルマンズ』や『赤と黒』など、スタンダールが王政復古期に企図した小説はどれも、虚構とはいえ同時代の現実に根ざし、反動政治下の社会的な矛盾を先鋭的に描き出すことを狙っていた。その意味で『ヴァニナ』のプランづくりの難所は、魅力的な女主人公をどのような歴史的枠組みに置くのかという点に存したはずである。

たしかに同時期の仕事、『ローマ散歩』は『ヴァニナ』と同じ時代と場所を扱っているだけに、スタンダールはここから物語化のための枠組みをえたと考えられなくもない。しかしながら、小説をつぶさに検証するならば、そのリアリズムの射程は明らかに『ローマ散歩』以後のローマの現状に及んでいる。ならば、1799年のサンフェリーチェの物語が、1820年代末の貴族娘ヴァニナと炭焼党员ミッシリッリとの恋物語へと変容したのには、作家の想像力を触発するいまひとつの跳躍台があったと考えてしかるべきであろう。その意味で特筆に値するのは、アンリ＝フランソワ・アンペールが『ヴァニナ』の源泉と見なす報道<sup>31)</sup>、すなわちローマの炭焼党にかんする「コンスチテュシヨネル」紙(1829年10月12日と同28日発行)の2つの記事である。

最初のものは、同年2月から継続している炭焼党员の非公開裁判の経過にかんする記事であり、潜入工作員が党员を罠にはめて司直の手に引き渡したこ



と、仲間の名を明かした党員が獄中で毒殺された疑いがあることを報じている。他方は、10月16日の少し前に炭焼党の集会所が摘発をうけ、26名の逮捕者をだした事件にかんする記事である。さらにこちらでは、予審が極秘で行われ、教皇自発教令による特別委員会も一切の情報を秘匿したため、事件は世間に知られぬまま、非公開審理の末に被告たちそれぞれに判決が宣告されたことが、彼らの氏名と刑罰の詳細とともに知ることができる。

アンベールが2つの記事（もちろん両者は異なる事件を扱っている）を『ヴァニナ』の着想源として挙げたように、それぞれに物語との類似が認められよう。しかし我々は、以下の理由から後者のほうがより重要な役割を果たしたと考える。まず、事件の概要と物語の骨子とが符合する点が挙げられる——。炭焼党の秘密集会所の摘発とそれに続く検挙者の極秘裁判、そして首領ただひとりに対する死刑判決と教皇によるその減刑。つまり10月28日の記事は、たとえば『赤と黒』にとってのベルテ事件のように、筋書の構築に少なからず寄与したに相違ない。

つづいて、28日の記事に登場する教皇ピウス8世も注目値する——「教皇は11日、以上の判決を承認した。しかしピウス8世の仁慈のおかげで聖職者ドン・ヨセフ・ピチッリの死刑は減刑された」<sup>32)</sup>。ピウス8世はレオ12世の後継者として1829年3月末に教皇に選ばれた。『ローマ散歩』の最終部でスタンダールがその教皇選挙会議を大きくとりあげた際、「この教皇とともにすべての徳が玉座に昇った」<sup>33)</sup>と好意的に記したようにピウス8世は穏健な人物であり、炭焼党員ピチッリに対する減刑は彼ならではの温情であろう。これに対して前任者のレオ12世のほうは極右過激派であり、炭焼党やフリーメーソンなどの秘密結社に対して厳しい政策・処罰で臨んだことで知られる。もちろん、どちらが『ヴァニナ』に登場する教皇のモデルになっているのかは、作中の台詞を読めば明らかであろう——「例のフォルリの炭焼党員のことだが、そのなかでひとり死刑判決をうけたものがありますな。それを考えると、私は夜も眠れない。あの男の生命を助けてもらいたい」<sup>34)</sup>。つまり教皇の人物設定という点からも、10月28日の記事が『ヴァニナ』の素材になったと推定する余地が生じるのである。

さらに同様の手がかりとして、炭焼党員の拘留場所にかんする細部も見逃せない。28日の記事では、無期懲役に減刑された首領ピチッリはサン・レオの城

塞に繋がれたと記されている。同様に『ヴァニナ』のなかでも死刑囚ミッシリッリは減刑後、サン・レオ城へ移送されるという設定である。ここで考慮すべきはアンペールの指摘する史実、すなわち1828年2月をもってサン・タンジェロ城が炭焼党員の拘置所としての役目をおえ、かわってサン・レオ城が1829年の初頭以降、もっとも危険な政治犯を収監する獄舎として用いられるようになったという事実である<sup>35)</sup>。物語の時代設定がこうした推移を踏まえているのは明らかであろう。炭焼党員ミッシリッリのサン・タンジェロ城からの脱獄に始まり、サン・レオ城への移送で終わるという『ヴァニナ』の物語を流れる時間は、1827年ないしは28年の春に始まり1829年4月以降にまで及んでいるのである<sup>36)</sup>。

このようなサン・レオ城にかんする詳細をスタンダールがいつ知ったのかも重要な問題であろう。というのは、『ヴァニナ』に先立つ『ローマ散歩』は炭焼党員の獄舎としてサン・タンジェロ城をとりあげるいっぽうで、サン・レオ城にはまったく触れていないからである。そのうえ前者についての記述には事実誤認がある。第2巻の1828年6月1日付の記述を読むと<sup>37)</sup>、当時まだサン・タンジェロ城に炭焼党員が拘留されていることになっているが、しかし現実にはすでに同年3月から要塞に党員は繋がれていない。スタンダールは『ローマ散歩』の制作当時、ローマにおける獄舎の移転を知らぬまま、この部分を書いたとしか考えられない。したがって、サン・レオの城塞が炭焼党員の新たな拘留場所になったことを作家が把握したのは、『ローマ散歩』の校正終了以降であったと推測され、また、そうであるだけに1829年10月28日の「コンスチテュション」紙の記事はその情報源として重大な意味をもつといえるのである。

もちろん、この記事がスタンダールの目にとまった時期についても一考を要する。1829年9月8日、『ローマ散歩』の発売を見届けた直後、彼はボルドー経由でスペインと南仏を巡る旅に出る。一仕事終えた作家にとって約1カ月半もの一人旅は次の創造のための充電期間となったことであろう。しかも旅の開放感だけでなく、憧憬の国スペインと紺碧の地中海がいやがうえにも彼の創作意欲をかき立てたはずだ。旅程の終わり、マルセイユでの逗留が『赤と黒』の創作において決定的な意味をもったことは良く知られている。備忘によれば同地を後にしたスタンダールは10月25日の深夜、リヨンを経てシャロンに到着

している<sup>38)</sup>。そこからパリに帰着したのは、おそらく翌々日あたりであろうか。彼がパリに戻り、10月28日の記事に出会ったのは、かかる昂揚した創造的イマジネーションの余熱がいまだ冷めやらない時だったのである。

### 3

ところで、作家がマルセイユでえた『『ジュリアン』のアイデア』もまた『ヴァニナ』の創作に影響したはずである。すでに別稿で論じたように、スタンダールはセートで読んだコルネイユ『セルトリウス』を着想源としてマチルド・ド・ラ・モールの性格設定を固め、さらに彼女とレナール夫人による競合関係という枠組みを物語に導入することで、小説第2部の礎石となる草稿を書いたと推測しうるからである<sup>39)</sup>。そうであるならば、ヴァニナもまたマチルドと同じくアマゾン系列のヒロインに属するだけに、10月28日の記事に先行する『赤と黒』の執筆は『ヴァニナ』の創作に何らかのかたちで関与したのではないだろうか。

しかも『ヴァニナ』の出発点が理想家されたサンフェリーチェ像であったのならば、女主人公の人物設定に変更があったことになる。なぜなら、すでに見たようにルイーザはスタンダールの想像世界にあってサンセヴェリナ公爵夫人と同系列の女性——単純にアマゾン系のグループに含めることのできない、母性的・献身的な側面を有する両義的な性格の女性——に分類されるからである。いったいなぜ作家はこのような当初のヒロイン像を退けてしまい、ヴァニナにアマゾンの典型ともいえる性格をあたえたのか。これらの問いに答えるためには、作家の伝記的な文脈において『セルトリウス』の読書がもつ意味にいま一度立ち返らなければならない。

1829年に入って間もなく、スタンダールは画家ウージェーヌ・ドラクロワの従妹の娘、アルベルト・ド・リュバンプレを知る<sup>40)</sup>。2月以降、彼女に対する興味は恋へと変わり、作家は毎晩そのサロンに足繁く通うほど彼女にのめり込む。このことが当時の仕事にも影響したことは、彼が『ローマ散歩』に残した暗号めいた注記のおかげで判明している——「1829年、復活祭の日。恋のために校正できず。6月21日、期待と幸福で校正にならず […]」<sup>41)</sup>。アルベルトは復活祭の頃、おそらくドラクロワと深い仲であった。備忘の前半は、校正が手

につかないほどスタンダールが嫉妬に苛まれたことを意味する。後半のほう  
は、彼女の気を引くためにアンスロ夫人に言い寄るといふ恋の戦術が功を奏  
し、彼が6月21日、ついにその思いを遂げたことを示す<sup>42)</sup>。しかし、おそらく  
幸福は長く続かなかった。というのは、『エゴチズムの回想』(1832年)の記す  
ところによれば、相思相愛もつかの間、こんどはメリメが彼の後がまに座った  
からである<sup>43)</sup>。失恋したスタンダールは起死回生の策をとる。彼が9月8日、  
恩人ダリュ伯の訃報に接したにもかかわらず、突如スペイン・南仏旅行に出発  
したのは、不実な恋人の心をとりもどす作戦だったとする説が有力である<sup>44)</sup>。

出発が関係修復のための賭であったのならば、すでに主な旅程を終えて帰路  
にあったといえるセート、マルセイユにあって、作家がパリにいるアルベルト  
の面影を眼前に思い浮かべなかったはずがない。期する再会の時が近づき、恋  
い慕う思いが高まれば、それだけいっそう彼の想像力は激しくかき立てられた  
のではなかったか。このことを確かめるには、『赤と黒』で同様の状況に置かれ  
た主人公の心理を想起すれば充分であろう。なぜならロベール・ヴィニユロン  
が浮彫りにしたように<sup>45)</sup>、スタンダールは『恋愛論』(1822年)のなかで披露し  
た恋の戦術をアルベルトとの恋の駆引きで実践し、さらにその体験をジュリア  
ン・ソレルとマチルドの恋愛に反映させたからである。作家と主人公の創造上  
の父子関係はもちろんのこと、アルベルトがラ・モール嬢の性格上の重要なモ  
デルに数えられることはいまや定説である<sup>46)</sup>——

いやでもストラスブールで1週間をすごさねばならなくなったジュリアンは、武勲  
のことや祖国に命を捧げることなどを、さまざまに空想して気をまぎらそうとした。  
彼はいったい恋をしていたのだろうか。当人にもさっぱりわからない。ともかく彼の  
苦しい胸のなかには、空想力も幸福も思いのままに左右するマチルドがあるばかりで  
あった。[…]

旅の生活の絶対の孤独が、この忌まわしい想像力をいっそう大きくした。<sup>47)</sup>

このジュリアンのように作家の想像力がアルベルトによって占拠されていたの  
ならば、『セルトリウス』の読書を通じて奔放な彼女の面影が、英雄との結婚を  
めぐって競合するふたりの誇り高きヒロイン、ウィリアーテとアリスティアの  
うえに重なることもありえたはずだ。あるいはむしろアルベルトのイメージを  
介して古代の女性たちは作家の脳裏に生き生きと甦った、そう考えることも許

されよう。このうえなく奥深い喜びをえたスタンダールの想像力は、だからこそ数日後マルセイユで『ジュリアン』のアイデア」を産みだすにいたったのである。才気煥発で飾り気のない美女アルベルトのイメージと、人並み外れた自尊心や英雄崇拜というコルネイユの要素とが融合し、ラ・モール嬢の原型が誕生した。いうなれば『セルトリウス』は、アルベルトの幻影に確固とした輪郭をあたえ、一個の芸術的な性格として作家の脳裏に定着させる役割を果たしたのである。

とうぜんマルセイユでの僥倖は、袋小路に陥っていた『ヴァニナ』の創作をも好転させたであろう。10月28日の炭焼党にかんする記事を読んだスタンダールは、貴族女性と過激共和主義者との恋という、ルイーザ・サンフェリーチェの物語からえた主題はそのまま残しつつ、中編小説の歴史的な枠組みとして同時代的意義を有するローマの炭焼党員摘発事件を新たに取り入れた。これと同時にヒロインの造型にあたって、そのとき彼にとって切実な意味をもつ女性像、すなわちアマゾン系列の女性像を採用したのだと思われる。

こうしたヴァニナ誕生にいたるイマジネーションの生成は、その痕跡をわずかながらテキストに留めている。炭焼党にかんする歴史的要素は、たんに筋書の構成や細部の現実性にかかわるだけではない。マリー＝クリスティーヌ・シニャクがいみじくも指摘したように、なによりもそれは祖国愛と恋愛との相剋という恋人ミッシリッリの心理的な設定、すなわち「真のコルネイユ的葛藤」<sup>48)</sup>にとって不可欠な前提となっている。愛するヴァニナとの結婚よりも炭焼党員としての使命を選ぶ若者の決断には、政治的な見地からウィリアーテとの結婚を断念するセルトリウスの潔さに通じるものがある。

ヴァニナもまた同様である。再会したポンペイウスと縊りを戻すことよりもスッラへの復讐のためセルトリウスとの政略結婚を毅然として選ぶアリスティアの胸中には情熱と自尊心との相剋が認められたように、ヴァニナの心理でもこれらの2要素は厳しくせめぎ合い、行動の発条となっている。彼女が密告の挙にでたのも、ミッシリッリが自分よりも祖国への献身を選んだことに自尊心をいたく傷つけられたためである。彼女は恋人の意志を慮ろうとせず、ひたすら彼を政治活動から引き離し、その心を独占することで情熱と自尊心の双方を満たそうとする。見方をかえるならば、ヴァニナはアリスティアと同じくエゴイズムに囚われた人物であり、その意味では彼女をフィリップ・ベルティエ

の表現を借りて「墮落したコルネイユ」<sup>49)</sup>と呼ぶことができよう。付言するならば、アルベルト・ド・リュバンプレとの恋の経験があればこそ、作家はこういったタイプの性格を実感し、生き生きと思い描いたのである、モーリス・バルデッシュは、恋人を苦しみ苛む「男性的な恋 amour viril」<sup>50)</sup>という最重要の事柄をスタンダールが彼女から身をもって学んだと指摘している。

こうした心理設定における『セルトリウス』と『ヴァニナ』の類似点、すなわちコルネイユ的葛藤が、むしろスタンダールの小説世界において例外をなすことを踏まえるならば、前者の読書後、時を経ずして後者が執筆されたという事実が重大な意味をもつのは明らかであろう。そうであるだけに、両者の中間点で着想された『『ジュリアン』のアイデア』が、マチルド像の造型にかんするものであった蓋然性はいっそう否定しがたいように思われる。

## 結 語

『ヴァニナ』の成立過程において決定的な転機をなしたのは女主人公の造型であった。アルベルトを恋い慕うスタンダールの想像力が『セルトリウス』に出会い、マチルドを創りだす。だが、不実な恋人のイメージを言葉によって定着しようとする試みはむしろ彼の情熱を満足させるまでにはいたらない。ついで新聞記事に想をえて『ヴァニナ』が書かれるも、深層の動機はアルベルトのイメージをなぞり反芻することにはかならない。マチルドとヴァニナ、自尊心と情熱の相剋に翻弄されるふたりの姉妹は、こうして相次いで誕生したのであろう。ところで、事実がそうであるのならば、かつてバルデッシュが『ヴァニナ』について述べた印象は正鵠を射ていたのではないか――

『ヴァニナ・ヴァニニ』の謎がある。『ヴァニナ・ヴァニニ』は『赤と黒』に似ており、同系列の作品、同じ鑄造からできた作品であると言うだけではとうてい不十分だ。これを読むと、次のような印象をこくに強く抱かざるをえない。すなわち、中編小説は長編小説よりも後に書かれたに違ひなく、作中人物とその行動が焼き付いたため、スタンダールの想像力はもはや彼らから離れることができず、彼らを再現し、別の形で存続させ、その丸写しやよく似た人物をつくりださずにはいられなかったのだ、と。<sup>51)</sup>

テキストの内的な読みによって導きだされたバルデッシュの洞察と我々の実証

的な検討をへた結論とが、はからずも一致をみたことになる。最後に、このことに関連するスタンダールの備忘をとりあげて擱筆したい。それは『ヴァニナ』の自家用初版テキスト（ミラノ市立図書館ブッチ・コレクション、「ルヴェ・ド・パリ」誌第9号）に残されたごく短い走書きであり、ミッシリッリがヴァニナへの恋心をひた隠し、ついに気位の高い娘から恋の告白を引きだす場面に記されている。すなわち曰く、「あまりにもジュリアンとマチルドだ」<sup>52)</sup>。『ヴァニナ』の上梓後3年がたって書かれたこのメモは、スタンダールが『赤と黒』との類似を把握したことを示唆するだけではない。彼が前者の主人公たちの性格や行為を意識的に写しとってジュリアンとマチルドの恋愛を描いたのであれば、けっしてこうは記さなかったであろう。ここにもやはりラ・モール嬢のほうがヴァニナよりも先に産みだされた痕跡を認めることができるのではあるまいか。

## 註

- 1) Voir Philippe BERTHIER, «Notice» pour *Vanina Vanini, ou Particularités sur la dernière vente de Carbonari*. Découverte dans les États du pape, in *Œuvres romanesques complètes I* de Stendhal. Préface de Ph. BERTHIER. Édition établie par Yves ANSEL et Ph. BERTHIER, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2005, p.926.
- 2) 次の拙論を参照されたい——「『ジュリアン』のアイデア」, 「ステラ」第24号, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 2005年12月, 59-63頁。
- 3) Voir Louis ARAGON, «Pour faire lire *Vanina Vanini*», *L'Humanité. Organe central du parti communiste français*, 12 mars 1956, pp.1-2.
- 4) Voir Ernest ABRAVANEL, «Préface» pour *Romans et Nouvelles*. Texte établi, annoté et préfacé par E. ABRAVANEL, in *Œuvres complètes*, Nouvelle édition établie sous la direction de Victor DEL LITTO et E. ABRAVANEL, Genève : Cercle du Bibliophile, 50 vol., 1967-74, t. 38, pp. VI-VII.
- 5) STENDHAL, *Promenades dans Rome*. Texte établi et annoté par Armand CARACCIO. Préface de Henri de RÉGNIER, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 7, pp.146-160.
- 6) Voir Boris Georgievich REIZOV, «Sur les sources de *Vanina Vanini*», *Stendhal Club*, n° 43, 15 avril 1969, pp.231-243.
- 7) Voir *ibid.*, pp.233-235.

- 8) Voir STENDHAL, *Rome, Naples et Florence*. Texte établi et annoté par Daniel MULLER. Préface de Charles MAURRAS, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 14, p. 27.
- 9) 同じく『パルムの僧院』第7章で語られるサンフェリーチェの人物像も、やはり彼女の実像とは異なっている——「この国に革命が起こるとすれば、以前ナポリでサン・フェリスがやったように、『モントーレ』を編集するあの婦人〔サンセヴェリナ〕の役だろう。だが、サン・フェリスは25歳の美女だったけれど死刑になってしまった。あまり才ばった女へのよい見せしめだ」(STENDHAL, *La Chartreuse de Parme*. Texte établi, annoté et préfacé par E. ABRAVANEL, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 24, p. 249)。なお、これ以下、スタンダール作品の邦語引用には『スタンダール全集』(桑原武夫他訳, 全12巻, 人文書院, 1977年)所収の各邦訳を使用した, 文脈によっては筆者が改変をほどこしたところがある。
- 10) Voir REIZOV, *art. cit.*, pp. 235-236.
- 11) Voir *Monitore Napolitano*, 13 aprile 1799, pp. 1-2.
- 12) 前掲拙論 54-58 頁を参照。
- 13) Voir David BRYANT, «Stendhal et la tentation de la “littérature facile” : être lu en 1830», *Stendhal Club*, n° 107, 15 avril 1985, pp. 267-268 ; voir aussi Michel ARROUS, «Revues auxquelles Stendhal a collaboré», in *Dictionnaire de Stendhal*, Publié sous la direction de Yves ANSEL, Philippe BERTHIER et Michael NERLICH, Paris : Honoré Champion, 2003, p. 608.
- 14) Prosper MÉRIMÉE, *Correspondance générale*, établie et annotée par Maurice PARTURIER avec la collaboration de Pierre JOSSEAND et Jean MALLION, Paris : Le Divan, 6 vol., 1941-1947, t. 1, pp. 44-45.
- 15) 原稿の受渡しから発行までの日数は, 「ルヴュ・ド・パリ」誌のばあい, 『ヴェニナ』の例から次のように推測できる。スタンダールが同作の原稿をヴェロンに送ったのが1829年12月3日, その掲載号の配本は同13日である。Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981-82, t. II, pp. 107 et 109. したがってメリメモ『聖体の4輪馬車』収載号の10日ほど前, つまり遅くとも6月初頭には原稿をヴェロンに渡したと考えることができる。
- 16) Voir STENDHAL, *Chroniques pour l'Angleterre. Contributions à la presse britannique*. Textes choisis et commentés par K. G. MCWATTERS. Traduction et annotation par René DÉNIER, Grenoble : ELLUG, 1980-95, 9 vol., t. VII, pp. 232-233.
- 17) Voir *Revue de Paris*, t. 5, août 1829, pp. 332-333. この匿名の近刊案内について我々はべつの場所でスタンダール自身の筆によると推測したが(前掲拙論 56 頁), 拙速な判断であったので取り下げざるをえない。
- 18) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la



- collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris : Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. III, p. 717.
- 19) Voir Frédéric SÉGU, *Un romantique républicain : H. de Latouche, 1785-1851*, Paris : Société d'édition, «Les Belles Lettres», 1931, pp. 258-272 ; voir aussi ARROUS, «Latouche», in *Dictionnaire de Stendhal*, op. cit., pp. 391-392.
  - 20) Voir *Bibliographie de la France, ou Journal général de l'Imprimerie et de la Librairie, et des cartes géographiques, gravures, lithographies et œuvres de musique*, n° 26, 27 juin 1829, p. 440 ; voir aussi *Le Globe*, n° 48, 17 juin 1829, pp. 379-381.
  - 21) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, pp. 714 et 785.
  - 22) *Ibid.*, t. IV, p. 461.
  - 23) Charles-Augustin SAINTE-BEUVE, *Causeries du lundi. Portraits de femmes et portraits littéraires*. Table générale et analytique par Charles PIERROT, Paris : Garnier frères, 16 vol., 1850-62, t. 3, pp. 492-493.
  - 24) Voir SÉGU, op. cit., p. 264.
  - 25) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. III, p. 703.
  - 26) Voir *ibid.*, t. III, p. 717.
  - 27) Voir *ibid.*, t. III, pp. 727-728.
  - 28) Voir *ibid.*, t. III, p. 729.
  - 29) Voir STENDHAL, *Correspondance inédite*, précédée d'une introduction par Prosper MÉRIMÉE, ornée d'un beau portrait de Stendhal, Paris : Michel Lévy Frères, 2 vol., 1855, t. II, pp. 69-74.
  - 30) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*, op. cit., t. VI, p. 407.
  - 31) Voir Henri-François IMBERT, *Les métamorphoses de la liberté, ou Stendhal devant la Restauration et le Risorgimento*. Avec un nouvel avant-propos de l'auteur, Genève-Paris : Slatkine Reprints, 1989, pp. 452-457.
  - 32) *Le Constitutionnel*, 28 octobre 1829, p. 1 ; voir aussi IMBERT, op. cit., p. 618.
  - 33) STENDHAL, *Promenades dans Rome*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 8, p. 267.
  - 34) STENDHAL, *Vanina Vanini*, in *Œuvres romanesques complètes I*, op. cit., pp. 265-266.
  - 35) Voir IMBERT, op. cit., p. 455.
  - 36) 作中では「182\*年の春」と物語の始まる時期は伏せられている。小説冒頭の舞踏会を主宰する銀行家B公爵が多くの研究者が考えるようにブラッチェーノ公爵を指すとすれば、ある程度は推測できる（voir Aimé DUPUY, «Un personnage de Stendhal : le banquier romain Torlonia», *Stendhal Club*, n° 41, 15 octobre 1968, pp. 53-59）。彼が1829年2月25日に他界したことについては『ローマ散歩』にその言及がある（voir STENDHAL, *Promenades dans Rome*, op. cit., p. 195）。したがって作家は1828年の春、ないしはその前年を想定したことになる。ただし

ミッシリッリがサン・タンジェロ城から脱獄するという物語冒頭の設定を考慮すると 1828 年春の可能性は薄まるが、しかし『ローマ散歩』制作中の作家はずっと同城を拘置所と誤認していただけに、『ヴァニナ』の執筆時点でもその役割を終えた時期までは把握しえずにいたことも考えられる。

- 37) Voir *ibid.*, t. 7., pp.177-178.
- 38) Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, op. cit., t. II, pp.105-106.
- 39) 前掲拙論 63-69 頁を参照。
- 40) Voir Robert VIGNERON, *Études sur Stendhal et sur Proust*, Recueillies par ses élèves en témoignage de leur reconnaissance. Avant-propos de René JASINSKI, Paris : Nizet, 1978, p. 101.
- 41) STENDHAL, *Promenades dans Rome*, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 8., p. 178.
- 42) Voir VIGNERON, *op. cit.*, pp. 95-96.
- 43) Voir STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme. Documents biographiques*. Texte établi, annoté et préfacé par Victor DEL LITTO, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 36, p. 86.
- 44) Voir VIGNERON, *op. cit.*, pp. 103-104. 同じく松原雅典『スタンダール / 愛の祝祭——『赤と黒』をつくった女たち——』, みすず書房, 1994 年, 231-232 頁を参照。
- 45) Voir VIGNERON, *op. cit.*, pp. 94-105.
- 46) Voir *ibid.*, p. 108 ; et BERTHIER, «RUBEMPRÉ, Alberthe de», in *Dictionnaire de Stendhal*, op. cit., p. 639.
- 47) STENDHAL, *Le Rouge et le Noir*. Texte établi et annoté avec une introduction historique par Jules MARSAN. Préface de Paul BOURGET, in *Œuvres complètes*, op. cit., t. 2, pp. 283-284.
- 48) Marie-Christine SYNAC, *Étude comparative de la création romanesque chez Stendhal dans «Vanina Vanini» et «Le Rouge et le Noir»*, Manuscrit conservé à la Bibliothèque municipale de Grenoble [R. 12004], 1973, pp. 41-42.
- 49) BERTHIER, «Notice» de *Vanina Vanini*, in *Œuvres romanesques complètes I*, op. cit., p. 927.
- 50) Maurice BARDÈCHE, *Stendhal romancier*, Paris : La Table Ronde, 1947, pp. 215-216.
- 51) *Ibid.*, p. 177.
- 52) «C'est un peu trop Julien et Mathilde.» (STENDHAL, *Vanina Vanini*, in *Œuvres romanesques complètes I*, op. cit., pp. 253 et 930).